

人類が定住生活を始めた1万1000年前に、最初に飼った野生動物が西アジアではムフロンやウリアル、東アジアではアルガリで、これらの雑種がヒツジとなりました。現在でも、ヒツジは大きくヨーロッパ種、アジア南方種、アジア北方種に分かれています。日本では、明治時代初めに毛織物を自給するためにオーストラリアからメ

リノ種を輸入しましたが、湿気に弱く失敗し、羊毛輸入に代わりました。輸入が途絶えた戦争中から戦争後にかけて、ニュージーランド産のコリデル種が輸入され、1970年代までの日本のヒツジはこの品種一色になりました。大学の品種はその時代の名残です。1990年代から皆さんも好きなジンギスカンがブームとなり、初め

は安い輸入肉が好まれましたが、国産のヒツジ肉も求められるようになり、肉用のサフォーク種に代わりました。大学校ではこの品種に会うこともできません。野生時代から現在まで、営々と続くヒツジの歴史を思い浮かべてみて下さい。  
（八ヶ岳中央農業実践大学校畜産部長、佐藤衆介）  
〓 随時掲載

# 野生時代から営々と続く歴史



多摩動物公園で見られるヒツジの祖先種であるムフロン。オスは大きな角を持っている。イタリアの西の地中海に浮かぶコルス島やサルデーニャ島に今も野生状態で約1000頭保護されている。2015年7月28日、東京都・多摩動物公園

2 ムフロンが祖先の中心です

ハケ岳山麓 ヒツジ編 動物ふれあい日記



毛も多く、肉も美味しい兼用種であるコリデル種。現在のヒツジの飼育頭数は2万頭程度ですが、1960年頃にはこの品種のヒツジが100万頭も飼われていた。2月6日、八ヶ岳中央農業実践大学校



東京都荒川区の旧千住（せんじゅ）製絨（せいじゅう）所前にある初代所長・井上省三氏とメリノ種ヒツジの像。明治の初めに、日本で初めて作られた羊毛の軍服を作るための毛織物工場跡地で、当時はメリノ種の飼育を推奨していた。2016年6月25日、荒川総合スポーツセンター付近



肉専用種であるサフォーク種。顔と四肢には羊毛が無く、黒いのが特徴。体重は重く、サフォーク種はコリデル種の1.3倍にもなる。ちなみにコリデル種はメリノ種の1.5倍の体重。2月24日、八ヶ岳中央農業実践大学校



佐藤衆介（さとう・しゅうすけ）

1978年に東北大学大学院農学研究科博士課程修了。80年から宮崎大学助手、88年から同大助教授を務める。94年に東北大学助教授に着任。2002年からは農業・生物系特定産業技術研究機構畜産草地研究所放牧管理部長。05年から東北大学大学院教授を務める。同大名誉教授。15年からは帝京科学大学教授。19年に八ヶ岳中央農業実践大学校（原村）の畜産部長となり、現在に至る。主な著書は「アニマルウェルフェア」（東京大学出版会、2005）など。